

サトリの  
ココロ [月1連載]

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、  
仏教に興味を持つ人が増えています。  
修行僧に聞く、弱い自分と向き合う方法——

NPO法人  
災害危機管理システムEarth理事長、  
日蓮宗立本寺住職

石原顕正さん

第5回

## 他人の幸福を 願える人を増やしたい

いしはら・けんしょう 1951年生まれ。立正大学仏教学部卒業。日蓮宗立本寺(山梨県甲府市)住職。1995年の阪神・淡路大震災より被災地支援活動を開始。1997年に市民参加型ボランティアネットワークEarthを立ち上げる。2005年「NPO法人災害危機管理システムEarth」に名称変更。新潟県中越地震などでも支援活動を展開。危機管理対策を中心に、防災・減災への実践に取り組んでいる。

わけではありま  
せん。それゆえ  
に、現場では何  
の役にも立てま  
せんでした。被  
災者に声をかけ  
ても「何しに來  
ただ！」と怒  
鳴られる。する  
べきことが分か

15年前の1月17日に発生した阪神・淡路大震災。テレビに映し出される被災地の惨状や人々の姿に私はただただ衝撃を受け、10日後の1月27日、乏しい知識で用意した救援物資を背負って神戸に向かいました。

「130万人の人が神戸に向かったといわれ、「ボランティア元年」という言葉が生まれたほど。しかし私も含め、すべての人が役に立つたわけではありませんでした。日本には、ボランティアに対する正しい知識が乏しかったのです。一方で、助けたい、役立ちたいという人々の強い思い……。社会にはやさしい人がたくさんいる、そのパワーを活かすことができるば……そう考えた私は、ボランティアが正しく機能するための受け皿となることを決意しました。」

支援活動を通して  
信頼の絆を結ぶことが大事

実際、阪神・淡路大震災では、130万人の人が神戸に向かったといわれ、「ボランティア元年」という言葉が生まれたほど。しかし私も含め、すべての人が役に立つたわけではありませんでした。日本には、ボランティアに対する正しい知識が乏しかったのです。一方で、助けたい、役立ちたいという人々の強い思い……。社会にはやさしい人がたくさんいる、そのパワーを活かすことができるば……そう考えた私は、ボランティアが正しく機能するための受け皿となることを決意しました。」

私が、被災地支援で一番こだわることとは、一時の思いつきや、その場限りの支援にならないようにすることです。時間をかけて気持ちや伝え、寄り添うことで、「いつでもいてくれる」という安心が生まれ、信頼を築くことができるのです。

さらに、私は被災地支援を通して、自分たちが被災者を支えているつもりが、実は彼らに支えられ、応援されていることに気づきました。大変な状況の中、私たちを笑顔で迎えてくれ、支援活動をする場を与えてくれた……。そう思えたとき、私は支援する「される」とい

う立場を超えて、人と人の絆を感じました。それこそが、私の目指す災害時の救援活動だと確信しています。

今年1月17日に行われた、阪神・淡路大震災15周年の「1・17市民追悼のつどい」。あの凄惨な震災の記憶を風化させたくない……。そんな思いで作った「神戸・希望の鐘」を、多くの人々が祈りを込めて打ち鳴らし、平和と幸福への思いをつにしました。

防災は人ごとではない！  
まずは危機意識を持つこと

9月1日は防災の日です。日本人にもボランティア意識が高まりつつあるとはいえ、防災意識や危機管理はまったく育っていないのが現状。それは「自分には起こりえない」という平和慣れた意識によるものです。過去の震災から何を学び、未来に役立てていくか。まずは自分の意識を少し、変えることから始めませんか？



神戸の市街地が一望できる諏訪山で行われた「市民追悼のつどい」。鐘の音と法華経が響いた。